

不寛容論

アメリカが生んだ「共存」の哲学

国際問題分科会 2021年度6月例会
6/22/2021

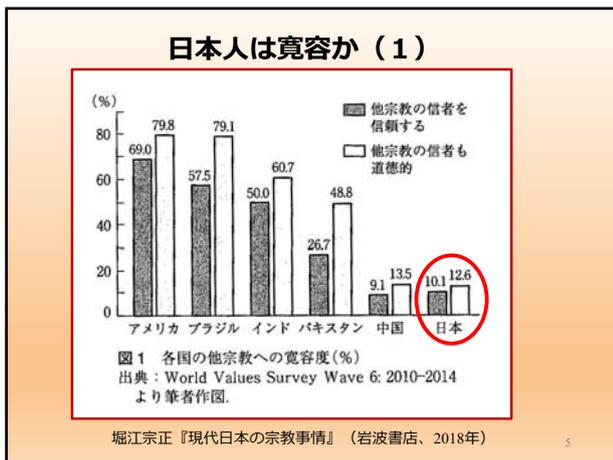
森本 あんり
(国際基督教大学)

1

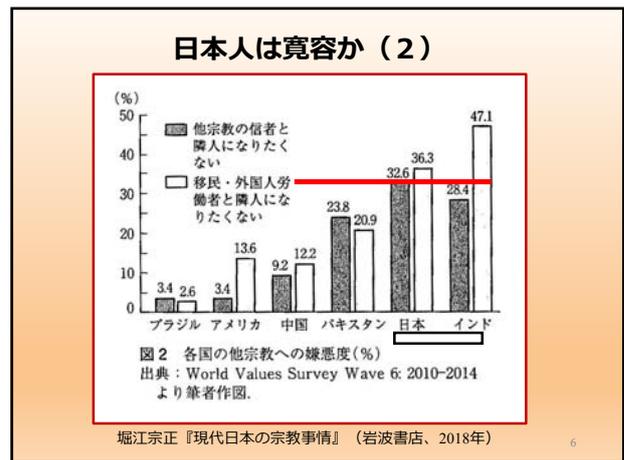
今日のメニュー

1. 寛容度の日米比較
2. 従来の寛容論の誤解
3. 寛容論の歴史的淵源
4. なぜロジャー・ウィリアムズか
5. 「誤れる良心」という焦点
6. 現代の不寛容を理解する

4



5



6

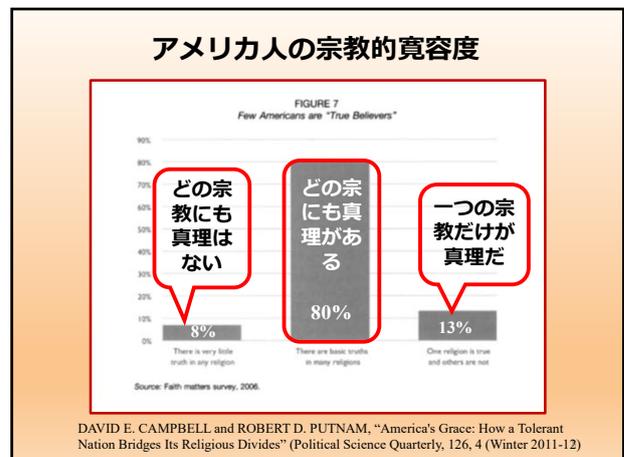
多様性をめぐる誤解

ただしこれは「世界価値観調査」
「内心でどう思っているか」 ≠ 「実際の付き合い方」
日本は「本音」「まごころ」主義
心の中までは踏み込まない = 「内心の自由」の尊重

アメリカと日本の違い: × 「一神教か多神教か」
○ 「多様か単一か」

多様性 = 「信じている神の数が多いこと」ではない
「多神教ばかり」「無宗教ばかり」なら単一
「多神教も一神教も・宗教に熱心な人も無関心な人も」
“Aunt Susan Effect”

7

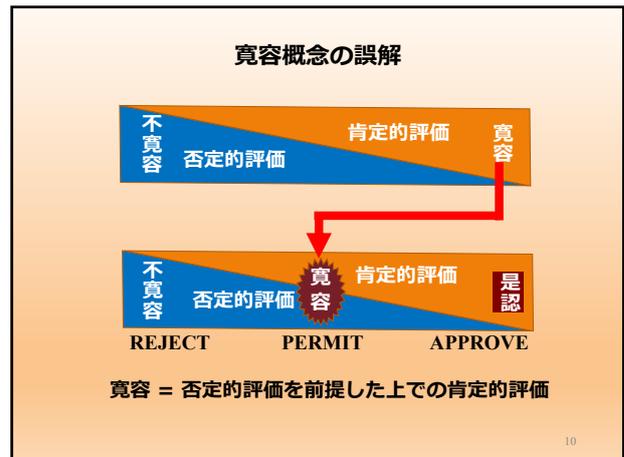


8

今日のメニュー

1. 寛容度の日米比較
2. 従来の寛容論の誤解
3. 寛容論の歴史的淵源
4. なぜロジャー・ウィリアムズか
5. 「誤れる良心」という焦点
6. 現代の不寛容を理解する

9



10

だから寛容は「不愉快」である

T. S. Eliot

現代は・・・

- ・「寛容」(上から目線)でなく「平等な権利」へ「みんな違ってみんないい」(金子みすゞ)ポストモダン的な差異の祝賀——実現可能か?
- ・自己の限定性に無自覚(普遍性主張)リベラリズムの欺瞞

現代社会でもっとも耐え難いのは寛容に遇されることだ

11

従来の寛容論がなぜ面白くないか

1. 「よい子のお道德」だった
不寛容なしに寛容はない(寛容の成立要件)

<寛容のパラドックス>

- ・否定的評価を前提した上で容認することだから好きなものに寛容になることはできない
- ・「寛容になれ」と強要する不寛容(特にリベラルが保守派に)
- ・近代西洋社会の基本原則(イスラム圏・同性愛)

12

イスラエル・フォロウ選手(オーストラリア)

Instagramに投稿「酔っ払い、同性愛者、姦淫者、嘘つき、姦淫者、盗人、無神論者、偶像礼拝者」には「地獄が待っている、悔い改めよ」

ラグビー協会は彼を追放処分(2019年4月。後に和解)

ラグビーは「年齢、人種、背景、宗教、ジェンダー、性指向」に関わらず誰でも楽しめるスポーツであるべきだ

15

今日のメニュー

1. 寛容度の日米比較
2. 従来の寛容論の誤解
3. 寛容論の歴史的淵源
4. なぜロジャー・ウィリアムズか
5. 「誤れる良心」という焦点
6. 現代の不寛容を理解する

16

寛容論の出発点はどこか

従来の解釈：宗教改革とその後
 宗教戦争に明け暮れた愚を悟った哲学者
 つまり近代啓蒙主義の産物（宗教＝不寛容、近代＝寛容）

すると、「哲学者の回廊」論になる
 ロック・ヴォルテール・ペール・ミル・・・



しかし、実は中世の教会法で高度に発展し継承された概念

- “ecclesia non approbat, sed permittit.”
- “maison de tolérance”（寛容の家）

17

17

中世的寛容＝「より小さな悪」

比較の上でより小さな悪を選ぶ (permissio comparativa)

異教徒を迫害する悪 > 容認する悪

- ・異教には寛容（外部の未回心者を中へ取り込む）
- ・異端には不寛容（内部の疫病を感染防止で排出）

寛容＝異質なものを内へ取り込むための作法
 受け入れの度合いはグラデーションになる
 一元的な価値世界でこそ有効

イスラーム的な寛容も同じ：
 異教徒に人头税を課した上で庇護の対象とする（不平等）



18

18

今日のメニュー

1. 寛容度の日米比較
2. 従来の寛容論の誤解
3. 寛容論の歴史的淵源
4. なぜロジャー・ウィリアムズか
5. 「誤れる良心」という焦点
6. 現代の不寛容を理解する

19

19

なぜロジャー・ウィリアムズか

17世紀ニューイングランド

- ・植民者たちは中世的な寛容理解を継承し発展させた
- ・宗教的良心が政治社会の建設へ具体化した歴史の実験

ロジャー・ウィリアムズ

ロンドンに生まれ、30歳で移住。
 すぐに植民地政府と争論に。

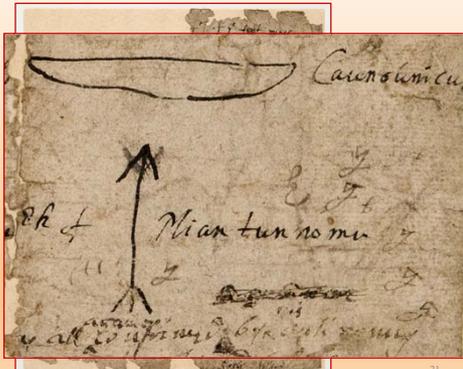
- ★「アメリカの土地の所有者は英国王ではなく先住民である」
- ★「住民に宗教的宣誓を課すことは違法」



20

20

追放されて先住民へ身を寄せ、正式な契約で土地を購入



21

21

やがて自ら植民地を開拓（現在のロード・アイランド州）

*We whose names are here
 desirous to inhabit in the
 Providence do promise to subscribe
 in actual or passive obedience to all
 such orders or agreements as shall be
 made by the major sort of the
 Inhabitants amongst of families
 together into a towne fellowship and
 others whom they shall admitt will
only in civill things*

「政府の権力は世俗的な事柄に限定される」

史上初の政教分離社会を建設（1638年頃）
 「ユダヤ人・トルコ人・異教徒・反キリストにも平等な市民権」

22

22

先住民の文化と礼節を尊重

- 『アメリカ語理解の鍵』
- 『洗礼が人をキリスト教徒にするわけではない』

「イギリス人は civilization をもつがアメリカ人の方が civilized だ」

その経験が文化や宗教を越えた寛容の可能性を拓いた

23

良心は普遍的か

ウィリアムズ：
「良心は、ユダヤ人にも、トルコ人にも、カトリックにも、プロテスタントにも、異教徒にも、人類すべてに見いだされる」

- 良心の内容は文化依存的だが、人間の道徳的な判断能力は普遍的（それを「良心」と名付けるかどうかはともかく）
- 道徳心をもつ = 人間の平等な尊厳の根拠（革命時代）

山に木が生えているように、人はもともと良心をもっている。だが、里人が山の木を伐採し続けていると、次第に木を育てる力がなくなり、ついには禿げ山となってしまふ。

孟子

24

ヌスバウムのウィリアムズ（RW）評価

- 寛容をヨーロッパ啓蒙主義と結びつけるのは間違い
- RWこそ「最初の偉大な理論家かつ実践者」
- ロックはRWを読んでいと推測
- ロックは自分の宗教的な前提に無自覚
- RWは静寂主義に陥らない実践へストア派「魂の凧」(ἀναπαύσις)

マーサ・ヌスbaum (2008・邦訳2011)
『良心の自由——アメリカの宗教的平等の伝統』

25

今日のメニュー

- 寛容度の日米比較
- 従来の寛容論の誤解
- 寛容論の歴史的淵源
- なぜロジャー・ウィリアムズか
- 「誤れる良心」という焦点**
- 現代の不寛容を理解する

26

「誤れる良心」をどう扱うか

ウィリアムズは彼らの信仰を是認しているわけではない
彼らの信仰は「誤り」だが、その良心を尊重し「寛容」にする
なぜなら「異教徒や異端者も、自分の良心に従っているから」

中世的理解：「たとえ誤った良心でも権威と拘束力をもつ」
だからそれに従う自由があり、その結果は罪に問われてはならない

エリザベス時代に死刑宣告を受けたカトリック司祭：
「もしわたしに一億回の命が与えられたなら、その命をすべてローマへの信仰に捧げる。」

ウィリアムズ：
「わたし自身は教皇主義者どもにいささかの支持を与えるつもりもありませんが、あの大胆さと信念と決意は、賞賛に値します。」

先住民にも同様に
首狩り、性関係、呪術、飲酒に、「間違っている」と不承認を伝える
ポストモダン的な諸文化の等価性や相互尊重のスローガンとは異なる

27

ではどこまで認められるか

ジョン・コトン（ウィリアムズの対論者）

形成途上の政治共同体：秩序＝寛容の「基礎工程」
宗教的逸脱→社会的逸脱への転化が必然でないこと
「内心は不服従でも偽善者の方がまし」
ほとんど冷笑的な現実認識

ウィリアムズも、次第に立場が変化してゆく

「異議申し立て者」から「建設者」へ

- 兵役訓練の拒否、割礼、メキシコの幼児奉獻など
- クエーカーの徹底的な平等主義＝市民的秩序の侮蔑と暴乱
- ある人の宗教的な信念の発露＝別の人には反社会的な行為
- 個人の内面は他者が判断できない→「良心を偽る」可能性

28

「良心の自由」はなぜ重要なのか？

マディソン「良心こそすべての権利の中でもっとも神聖なもの」

サンデル「良心は不自由だから」 (the "dictates" of conscience)

良心の自由は、「選択の自由」が宗教へと特化したものではない
良心は、それ以外の選択をすることができない拘束力をもつ
だからこそ、他の自由に優る特別な保護を受けねばならない

人は宗教を選ばない

- ・「セヴンスデー・アドヴェンティスト」
七日のうちから自由に土曜日を選んだわけではない
- ・「エホバの証人」
絶対平和主義でスポーツとしての剣道の授業も拒否

「負荷ある自我」
自分の願いや市民的義務に逆らってすら断念できない宗教的義務
自由なライフスタイルの選択というリベラリズムの理念とは異なる

29

今日のメニュー

1. 寛容度の日米比較
2. 従来寛容論の誤解
3. 寛容論の歴史的淵源
4. なぜロジャー・ウィリアムズか
5. 「誤れる良心」という焦点
6. 現代の不寛容を理解する

30

従来寛容論がなぜ面白くないか

1. 「よい子のお道徳」だった—「不寛容」という要素の欠落
2. 近代啓蒙主義の前提に無自覚だった—中世的な淵源
3. 21世紀的な寛容論の「捻れ」に対応できない

伝統的な問い「民主主義への不寛容に寛容であるべきか？」
近年の北欧諸国「わが国の寛容を守るため移民に不寛容に」

- ・そもそも近代は不寛容な社会を作る
「地縁血縁の一次的結合」から「自発的結社」へ
生まれによる参入でなく、参加の意志と資格を問うから
- ・いかなる社会も無条件に寛容であることはできない
リベラリズムの普遍性主張への批判

31

移民問題の困難

David Goodhart (2004)

- ・「福祉を手厚くすればするほど支持が減る」というジレンマ
- ・「sustainableでない移民政策」全人類が英国籍をとったら崩壊

Michael Anton (2018)

- ・トランプは正しい「国境なければ国家なし」国境こそ市民を作る
独立宣言の求める「平等」は国民の中でだけ実現可能
- ・「出生地主義」(jus soli) は不条理だ
「巨大な磁石」中国人妊婦ホテル
- ・修正14条は黒人の子の市民権を意味しており、
不法移民の子への拡大適用は誤読

F. H. Buckley (2018)

- ・カナダのポイント制＝早い同化、非熟練労働者は社会流動性を下げる
- ・「安価なメイドと庭師」を求める「アメリカの貴族」の妨害

32

現代の不寛容を理解する

Michael Anton: アメリカは・・・

- ・「全人類の共通財産」ではない
- ・「移民の国」ではなく「植民者の国」だ
- ・「社会契約」による近代国家だ

つまり現在の市民の同意なしに新しい市民が加わることはできない

まさにそれが、初期入植者たちの共通理解だった

「市民政府は、すべて自由な同意により創設される。何人もわれわれの同意なしにこの地に来て住むことはできない。われわれは、破滅や損壊の危険を招くと思われるものを排除する。これは合法的である。」 (John Winthrop, 1637 ← 拙著『不寛容論』2020)

33

リベラリズムの(自己)欺瞞

ただし！

- ・「契約」はやがて全員でなく代表者で
- ・「私的社會」から「公的社會」へ変貌
- ・「植民者本人」ではなく「子」(受益者)

Patrick Deneen 『リベラリズムはなぜ失敗したのか』

気高い嘘

- ・労働者に信じ込ませる
「リベラルな世界秩序が浸透すれば暮らし向きもよくなる」
- ・自分自身に信じ込ませる
「自分は新しい貴族階級ではなくその対極にいる」

トランプ支持は、リベラリズム自身が生み出した歴史的帰結

34